

“ 食べるために生きるな、生きるために食べよ ”

雅 20180624

『空の朝食』

公務の日の朝。

それはいつも変わらず慌ただしい。

ゆったりした朝に変えるのは己の意志次第なんじゃないだろうかとかそんなことはともかく、今日もレオアリスは離れたい寝台の中で、二度寝とハヤテとの早朝散歩と、二つの魅力的なせめぎ合いを頭の中で繰り返したあと、結局後者を選んで飛び起きた。

これもいつものことだ。

六刻きっかり、ちょうど遠くで時計塔の鐘が響き始める。

ずばっと脱いだ部屋着を寝台に放り、壁に掛けていた近衛師団の士官服を左手に掴み、階段を駆け下りる。水場で顔を洗って士官服に袖を通し、玄関へ向かうついでに厨房で棚から林檎と干し肉を一つずつ取った。

七刻には士官棟にいらなくては。

館の敷地内にある小ぶりの厩舎に駆け込む。ここまで四半刻もない。いつも通り。

「ハヤテ」

弾んだ声に、銀翼の飛竜が待ち兼ねたように首を伸ばした。

冷えた鱗に左腕を回して長い首を軽く叩き、干し肉を差し出した。

「おはよう、飛ぼう」

レオアリスの言葉もせっかちだがハヤテはもっとせっかちだ。干し肉を奥歯に啜えるのもそこそこ、レオアリスを首に掴ませたままトコトコと歩き出した。

空を駆ける勇壮な姿と地上を歩く姿との落差が激しい。レオアリスは口元を綻ばせつつ地面を蹴り、ハヤテの背にすんと収まる。

もうハヤテは厩舎の外に出ていて、官舎の庭先から空へ向かい、銀色の翼を広げた。

風が身体を取り巻き、過ぎて行く。

春めき始めたばかりのこの時期、上空ともなれば一層風は冷たいのだが、青い空がどこまでも自分を包み込むように広がり、とても心地良い。

すっかり王都の外へ出ていて、眼下には緑の色が増し始めた畑や林が広がっている。

「いつも通り思いっきり飛んだ後、王都の周りをぐるっと一周して戻ろうぜ」

翼をゆったりと羽ばたかせ風を切るハヤテは、本当に嬉しそうだ。

「ハヤテ、朝メシ足りないだろ？ もう一つ持ってきてくりゃ良かったな。リンゴ食う？」

視線が上がり、差し出した林檎に首が振られた。レオアリスの朝食

だ。食べると言うように長い首を傾げる。

「第一の厩舎に行ったら朝メシまだだって言っとくよ」

そう言ったところで毎回厩舎の管理官にはバレているのだが。

『上将がそうやって甘やかすからハヤテが食べてない振りするんですよ。量はともかく、決まった時間に食事する習慣をきちんとつけないと。まあ育ち盛りですから仕方ないですが』

「育ち盛りだつてさ、たくさん食つてもっと速くなれよ」と言ったら『煽らないでください』とたしなめられた。

手にした林檎を齧る。

爽やかに広がる果汁と軽い歯触りが、空の上ではより一層美味しく感じられる。

寝起きの乾いていた身体に染み渡るように思えた。

「やっぱり朝食は空でだよな」

果物なら一番は水気の多い桃や葡萄が好きだが、ハヤテの背の上で食べるには、片手でも食べられる林檎がちよほどよかった。

もう一個あっても良かったな、と思うのもいつものことだ。けれど食べている時間が惜しい。

それはハヤテも同じのようで、レオアリスが食べ終わったと思うや、ハヤテは速度を上げた。

「行くか」

手綱の張りを感じ取り、ハヤテが翼を畳む。

ぐんと急降下した。真下を流れるのは大河シメノスだ。

風が耳元で唸り、シメノスの川面が見る見る近づく。

「ハヤテ——好きに飛べ！」

着水ギリギリでハヤテは首を持ち上げ、今度は川面に並行して駆けた。ハヤテが纏う風がシメノスの輝く川面を割り、波打たせる。

そのままシメノスの岸にある低い監視塔の横をすり抜け、一本立つ背の高い箱柳の木を躲すように飛ぶ。

レオアリスの喉から笑い声が弾け、ハヤテもまた嬉しそうに双眸を細めた。

再び空へと駆け上がり、ぐるりと縦に大きな円を描く。

もう一度。

更に大きな円が空を切り裂く。円が頂点に達する前に、レオアリスはハヤテの背を離れた。

耳を震わせる風の音、ぐるりと回る視界の、透ける青い空と地上のシメノスの光、緑の大地。

——王都。

朝日を受ける王城の尖塔、そこに座すのは彼の——  
縦に旋回したハヤテがレオアリスの身体を受け止めた。

空中散歩の時間はあつという間だ。王都の時計台の示す時刻を確認し、ハヤテの首を王城へ向ける。

レオアリスはまだ物足りなさそうなハヤテに同調する気持ちを抑え、手綱を繰った。

最後にもう一度だけ、銀翼の飛竜は空の中で弧を描いた。

『団欒の昼食』

「はい、どうぞ、上将」

正午の鐘が午前の仕事の終わりを報せる。

鐘が鳴り終わる辺りでレオアリスの執務机の上に置かれたのは、葡萄の蔓で編んだ四角い籠だった。置いたフレイザーが机の向こうで腰に手を当てる。

「今朝も遠駆けをされてたみたいですから、朝をしつかり食べてないでしょう。駄目ですよ、時間が惜しいのは判りますけど朝食を林檎一つとかで済ませたら。育ち盛りなんですから。あと四半刻早く起きればいいんじゃないですか？」

「どうやら色々バレている。」

「努力する」

そう、明日はもっと早く起きようと決意するのは毎回のことで、できると毎回思う。けれど、まあ大抵はご覧の通りだ。

レオアリスは籠を手に取り、蓋を開けた。

「うわぁ」

中に詰められているのは、ガレットタという蕎麦粉を溶いて薄く焼いたもので瑞々しいチシャや玉葱、塩漬け肉、チーズなどを包み、それらが布を敷いた籠の中に見栄え良く盛り付けられている。

付け合わせに人参の千切り酢漬けが彩りを添え、果物は赤く艶やかな苺や瑞々しい断面を覗かせている蜜柑、それから蜂蜜漬けの林檎。

とても美味しそうだ。

「これフレイザーが作ったのか？」

周囲で「えっ」と声が上がった。フレイザーが声の主のクライフとヴィルトールをジロリと睨む。

「何かしら」

「いや、とても美味しそうだね」

ヴィルトールはそつなく微笑んだが、クライフは、あつ、と頷いた。「焼いて包むだけだしな！」

「……何かしら……」

殺気に満ちた視線を浴びてクライフが青褪めた。ヴィルトールが「おバカだなあ」と肩をすくめる。

「これ、俺が貰っちゃっていいの？」

「ええ、上将にと思って持って来たんです。お昼はいつも食堂でしょう。たまにはいいと思って。どうぞ召し上がってください」

レオアリスは瞳を輝かせた。

「ありがとうございます！」

レオアリスは籠を手にも、執務室に置かれた長椅子に移動すると、早速一つを手を取った。

嬉しそうに瞳を細めてレオアリスの様子を眺めるフレイザーの側にお腹を空かせたクライフがつつつ、と近寄った。

「俺の、いや、皆の分があつたりなんかして……」

「えっ」

フレイザーはさつと頬を赤らめた。

「あの、……あるわ」

「えっ」

今度はクライフの目がきらきらと輝く。

フレイザーはもう一つ、大きめの籠を持ち上げ、嬉々として手を伸ばしかけたクライフに気付かず、まだ執務机に向かっているグランズレイに遠慮がちな声を掛けた。

「あの……、その、ついたくさん作っちゃったので、ふ、ふ、副将もいかがですか？」

がつくりと項垂れたクライフを他所に、ヴィルトールは自分の愛妻弁当を持ってレオアリスの向かいに座った。

「食堂も悪くないですが、こうやって食べるのもいいですねえ」

「昼くらいだもんな、全員揃って食べるの」

「ですね。ああ、何か飲み物でも」

「どうぞ」

二人の間の卓に差し出されたのは、紅茶の注がれた繊細な磁器の器だ。窓から差し込む光を受けて、器の底の模様が透き通って揺れる。

差し出したのはロットバルトで、そのままレオアリスの右斜め前の長椅子に腰を降ろした。

「ありがとう。ロットバルトが淹れてくれる紅茶って美味しいよな」

「いやあ、私は未だにロットバルトが自分で紅茶を淹れてる図が想像付きませんよ」

「官舎では人手がない時もありますからね。特に夜中は」

「結構いつも二刻か三刻くらいまで起きてるだろ。早く寝ろよ」

レオアリスの官舎の隣がロットバルトの官舎で、時折夜中まで窓に灯りが灯っているのを目にすることもあった。

「それに気付いてる上将も早く寝てくださいね。夜更かしは良くない

ですよ。早めに寝れば朝すんなり起きられます」

ヴィルトールは兄か父のようにそう言つて、紅茶の器を手に取り、一口飲む。

「――茶葉が、恐ろしいほどいいよね……」

ただ、茶葉を生かして美味しい紅茶を淹れるのはコツが要る。とことん突き詰める性格だなあ、とヴィルトールは口元に笑みを忍ばせた。

レオアリスが右隣を見る。

「お前、紅茶だけ？」

ロットバルトの手にしているのは書類だ。いつもロットバルトは余り昼食を取っていないのだが、自分の前にとっても美味しい昼食があるので、もったいなくて差し出した。

「フレイザーの作ってくれたの、美味いぜ」

「何だ何だ！ 昼メシ時に書類はやめようぜ！」

ロットバルトの書類をひよいと奪ったのはクライフで、嬉しそうに抱えていた籠を卓の真ん中に置いた。

「副将、フレイザーも、座って座って」

自分はヴィルトールの隣に座り、「狭いよ」と言われるのも意に介さず、「あ、上将すんません、ロットバルトの隣に詰めてください」とレオアリスを動かさず、空いた長椅子をグランズレイとフレイザーに示した。

「はい二人とも、そこ、早く座って」

眺めていたヴィルトールがうっと目頭を押さえる。「健気……」

「副将、どうですか、フレイザーの弁当美味しいですか」

「ああ、とても美味しい」

「良かった……」

フレイザーが真っ赤になった頬を押さえる。

滲む涙が止められないヴィルトールの脇腹をクライフが肘でどついた。

とても美味しかった食事を終え、レオアリスはもう一杯淹れてもらった紅茶の器を手にして、長椅子の背もたれに寄りかかった。

こうして六人で昼食を取るのを楽しんでいる。

「本当に美味しかった。フレイザーに感謝だな」

「そう言っていただけだと嬉しいですわ。また持ってきてますね」

「私の妻の弁当もすごく美味しいですよ」

「そこ、張り合うな」

「今度俺も作ってこようかな」

そう言いながら窓の外を見て一つ、レオアリスは心残りを発見した。

「これだけ天気がいいと外で食べても良かったかも」

日差しが注ぐ中庭とかに卓を出して昼食を取ったら、ますます楽しそうだ。

外ならハヤテもいられるし、とか思う。

「あら、じゃあ明日は外で食べましょうか。皆で持ち寄るのもいいですね」

フレイザーは空になった二つの籠を片付けながら、にっこりと微笑んだ。